

# 鳴門市ドイツ館所蔵品目録

板東俘虜収容所ならびに第一世界大戦時の全国収容所関連史料

## 目次

はじめに	3
第1部 板東俘虜収容所捕虜製作印刷物	5
1. 書籍、冊子類	7
2. 音楽プログラム	28
3. 演劇プログラム	92
4. 演芸会、スポーツ大会などのプログラム	108
5. ポスター、ちらし、地図	118
6. 絵はがき、切手	127
第2部 その他	
1. 印刷物以外の板東収容所捕虜製作品	138
2. 板東収容所捕虜所持品その他	146
3. 板東収容所関連物品	149
4. 板東収容所以外での印刷物と製作品	152
5. 写真アルバム	158

## はじめに

ここに掲載する史料は、鳴門市ドイツ館が所蔵しているオリジナルなものばかりである。研究史料として価値あるものであっても、複写は除いている。今回の目録作成にあたって収録の方針として、第一次世界大戦当時のものに限定することとし、板東俘虜収容所での捕虜印刷物を初めとして、他収容所の印刷物、捕虜の製作品、捕虜および収容所関係者が所有・使用していた物品とした。この方針によって、ここに漏れる所蔵品は、絵画や家具、貨幣、人形、模型、陶器、玩具、楽器、レコード、CD など第一世界大戦前後から現代にいたるまで多岐にわたるが、それらについては別の機会にまとめることとしたい。

絵はがきについては、捕虜制作によるものだけをここに収録した。それ以外の収容所関連の絵はがき（写真はがきも含む）と捕虜から（または捕虜宛）の私信（手紙およびはがき）は未整理のものもあり、あえて収録しなかった。また、捕虜の生活や収容所内外を撮影した写真も当時の様子を知る上で非常に貴重な史料ではあるが、それらは別の機会にまとめることとし、捕虜所有の写真アルバムの外観とその一部だけを掲載した。

ここに収録する史料は、多くのばあい寄贈によって鳴門市ドイツ館が所蔵するにいたったものであるが、元捕虜の名前を除き、あえて寄贈者または旧所蔵者の名前はここに掲載しなかった。ご好意をいただいた方々には、その点のご了解とお許しを願いたいと思う。

板東俘虜収容所での捕虜製作の印刷物については、合わせて 298 点が一括して徳島県登録有形文化財に指定されている。そこで、昨年「板東俘虜収容所における捕虜製作の印刷物—鳴門市ドイツ館所蔵品図録」（以下、「図録」と称す）という冊子を制作したが、極めて少数しか印刷せず、また配布先も極めて限定されていた。そこで今回の所蔵品目録には、この「図録」の内容も再録することとした（ただし一部手直しがある）。なお、この印刷物の点数は後の調査で追加したものを含め 303 点となっている。

印刷物以外の捕虜による製作品と所持品については、収容所内で製作した物か、外部で製作されたものを単に所有していたかの判定に困難なものもあるが、寄贈時の記録に基づいて振り分け、それでも不明な物は「所持品その他」に分類した。

史料の整理番号の割り当ては次のとおり。

板東俘虜収容所捕虜製作印刷物	Pnnnn (n は数字を示す。以下同様)
印刷物以外の板東収容所捕虜製作品	Wnnnn
板東収容所捕虜所持品その他	Bnnnn
板東収容所関連物品	Cnnnn
板東収容所捕虜以外による印刷物ならびに製作品	Ennnn
写真アルバム	Annnn

なお板東俘虜収容所捕虜製作印刷物については、P というカテゴリー表記文字を追加して数字を 4 桁に統一した以外、「図録」の番号をそのまま踏襲している。

## 第1部 板東俘虜収容所捕虜製作印刷物

ここに収録の印刷物は第一次世界大戦時、ドイツの租借領であった中国青島への日本軍の攻撃に敗れたドイツ兵が板東俘虜収容所に収容された後、さまざまな機会に出版したものである。

第一世界大戦当時に限定しても、世界各地の捕虜収容所ではいろいろな出版物、とりわけ捕虜相互の意思疎通や連帯感の確保のために収容所新聞が発行され、催し物のパンフレットなどが制作されていた。そして、それらが発行するために捕虜が運営する収容所内の印刷所もあった。そうした中で、板東収容所での印刷物は種類、数量、質の点で、さらには美術的な観点からも群を抜いている。第一世界大戦時に各地の捕虜収容所で発行された新聞を研究した Rainer Pöppinghege(2006) もそのことを指摘していて、単に地元だから高い評価を与えたというわけではない。

さて、その印刷物の種類だが、ここでは次のようにグループ分けし、順次画像とともにタイトルやサイズ、印刷の種類などを記述し、簡単な説明を付した。ただ、印刷物ゆえに重複するものも多くあるので、それらについては番号をあげるのみとし、画像はそのうちのひとつだけ掲載した。

### 書籍

画集や冊子類もここに入る。また講演会での配布資料も冊子にまとめられたものは、この中に入れてある。

### プログラム類

板東での印刷物中、多色刷りのものが多く、もっとも華やかで美しい。音楽会がもっとも多く、ついで演劇プログラム。そのほか演芸会、講演会、スポーツ大会などがある。

### ポスター、ちらし、地図

### 絵はがきおよび切手

### 印刷所

板東俘虜収容所には、それぞれ印刷方法を異にする2カ所の印刷所があった。ひとつはもっぱら謄写版による印刷を行っていた所で、ドイツ語では単に Lagerdruckerei (収容所印刷所) と表記されたり、Lagerdruckerei Bando (板東収容所印刷所) と表記されたりしている。ここは印刷だけでなく、製本も行っていた。もうひとつは主に石版印刷を使用していたところで、絵はがきなどではドイツ語で Steindruckerei (石版印刷所) という表記がされている場合があるが、特別な表記がない場合もある。たとえば『鉄条網の中の4年半』では文字としては「板東で印刷された」としか記載がないが、その画質から謄写版でないことは明らかである。また、裏表紙に描かれている挿絵は石版印刷機そのものであることも石版印刷所で印刷されたと断定できる理由である。一方、『鉄条網の中の4年半 追録』では最終ページに「板東東印刷所」印刷という字句があるが、板東の東地区にあった印刷所とは石版印刷所のことである。

### 謄写版技法について

謄写版は、すでに板東に来る以前の徳島俘虜収容所で発行されていた週刊新聞 Tokushima Anzeiger (『トクシマ・アンツァイガー』、『徳島新報』と訳されることもある) の印刷に用いられていた。この新聞の発刊は1915年4月5日のことであって、捕虜たちは日本に収容された早い段階から謄写版の存在を知り、その技術に慣れ親しんでいったと思われる。Tokushima Anzeiger にも多くの挿絵が使われていて、インクも黒以外に赤、緑、茶色が使われていることもあった。このころの絵では塗りつぶしに線を無数に引く方法だけでなく、べた塗りの印刷もすでに使われている。

Tokushima Anzeiger 中の挿絵の説明から、この時に使われていた謄写版はドイツ製ではなく、日本の「堀井謄写堂」の製品であることは間違いない。するとそれを引き継いだ板東もほぼ同じであろう。志村章子(1995)もそう指摘する。それによると、このメーカーは陸軍と太いパイプを持っていたということなので、捕虜が収容所に入った当初から収容所事務室で目にしていたことは十分考えられることである。

板東では、徳島収容所の捕虜からもたらされた謄写版をさらに独自に発展、さまざまな技法を駆使して美術的にも高度な作品を制作していった。これは、日本人によるさまざまなアート技法が大正末期以降に開発されていったのであり、それに先行する優れた技術であった。板東俘虜収容所所長の松江豊寿もこれに着目し、陸軍への報告に彼らの優れた謄写版印刷技術を収容所職員に学ばせていると書いているほどである。しかし、彼らの技法が日本側で普及し

ていったという痕跡は残念ながら見つかっていない。

### 製本

収容所印刷所は製本部門も併設していて、厚紙製本だけでなく、かなり本格的な書籍の布張り製本も行っていた。その布張りに謄写版印刷が行われている点も注目して良いのではないと思われる。にじみやインクの油がしみ出しが見られないのだが、どのように印刷したのであろうか。

### 使用字体について

当時の国内収容所ではタイプライターはあったものの、多量に印刷・配布に使用できるものではない。活版印刷などむろん望むべくもなかった。ほとんどの場合、謄写版が使われたのである。そこで手書きによるガリ切りとなるが、その際に用いられた書体はたいてい昔のドイツ語筆記体であり、一部がラテン文字体に近いブロック書体であった。そのために習熟していない人にとっては非常に読みづらいものであるが、文字自体は非常に丁寧に書かれていて、鉄筆を取る人の几帳面さが現れている。

### 制作者について

書籍やプログラム類には、制作者の名前ないしイニシャルが記載されているものがある。この中で、『ディ・バラツケ』には編集部スタッフの名前が記載されているが、このうちの誰が記事を書き、ガリ切りをしたかは書かれていない。幸い、後に述べる『三つの童話』に制作者が上記編集部スタッフの一員であるグスタフ・メラーだと記載されていること、そのイニシャルの G.M. もそこに見られることから、イニシャル署名のひとりの特定はできている。プログラム中の制作者の署名は他に F.S. があるが、板東収容所には F.S. のイニシャルの人物は 16 人もいて、こちらは残念ながら誰か不明である。

## 1. 書籍、冊子類

### P0001

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 第1巻

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan. Band I

1918年3月発行

謄写版（一部多色刷）

19.8cm × 27.4cm

607ページ

布張り上製本

『ディ・バラック』は板東俘虜収容所で捕虜により発行されていた週刊（後に月刊）の新聞である。編集者には5人の名前があがっているが、そのうち途中でスタッフがひとり交代している。この第1巻は1917年10月から1918年3月までの合わせて26号分をまとめ、合本としたものである。記事本文に用いられている字体は当時のドイツ語筆記体であって、現在のドイツや日本で使われているローマ字筆記体とは全く異なる。鳴門市ドイツ館史料研究会によりローマ字化した復刻版CD-ROM（第4巻までを収録）が制作、発行されている。



### P0002, P0003

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 第2巻（1918年4月～9月）

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan. Band II, April-September 1918.

1918年9月発行

謄写版（一部多色刷）

19.8cm × 27.3cm

727ページ

布張り上製本

これも第1巻と同様に合本として発行されたものである。この第2巻は通巻で第27号から第53号が収められている。



第2巻見開きの中表紙

## P0004, P0005

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 第3巻 (1918年10月～1919年3月)

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan.  
Band III, Oktober 1918-März 1919.

1919年3月発行

謄写版 (一部多色刷)

19.8cm × 27.2cm

623ページ

布張り上製本

第1巻、第2巻と同様、合本として発行されたもの。この第3巻は通巻で第54号から第79号までを収めている。



## P0006

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 第3巻下 (1918年12月～1919年3月)

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan. Band III, Dezember 1918-März 1919.

1919年3月発行

謄写版 (一部多色刷)

19.8cm × 27.2cm

623ページ

紙表紙簡易製本

第3巻すべてではなく、後半の第12号から26号までを合本としたもの。

## P0007, P0008, P0009

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 1919年4月号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan. April 1919

1919年4月発行

謄写版 (一部多色刷)

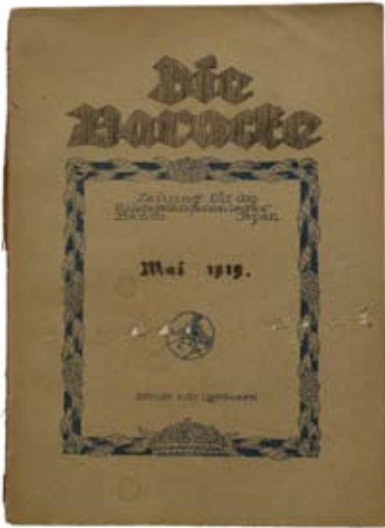
19.4cm × 26.7cm

164ページ

紙表紙簡易製本

『ディ・バラック』の週ごとの発行は1919年3月までで、4月からは月刊となった。その理由は戦争が終結し、捕虜の解放が近いかもしれないので、月刊による発行の方が発刊停止に対応しやすいことを考慮したからであった。





P0010, P0011, P0012 (上左)

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 1919年5月号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager  
Bando, Japan. Mai 1919

1919年5月発行

謄写版(一部多色刷)

19.4cm × 26.7cm

146 ページ

紙表紙簡易製本



謄写版(一部多色刷)

19.4cm × 26.5cm

124 ページ

紙表紙簡易製本

P0013, P0014, P0015 (上右)

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 1919年6月号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager  
Bando, Japan. Juni 1919

1919年6月発行

P0016, P0017, P0018 (下左、下右)

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 1919年7月号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager  
Bando, Japan. Juli 1919

1919年7月発行

謄写版(一部多色刷)

19.4cm × 26.5cm

108 ページ

紙表紙簡易製本





## P0019, P0020

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 1919年8月号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan. August 1919

1919年8月発行

謄写版（一部多色刷）

19.2cm × 26.3cm

111 ページ

紙表紙簡易製本



## P0021, P0022, P0023

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞

1919年9月号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan. September 1919

1919年9月発行

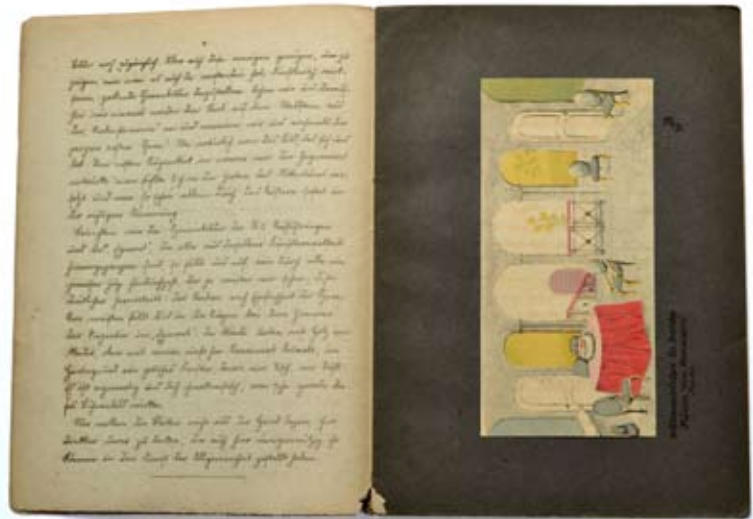
謄写版（一部多色刷）

19.3cm × 26.4cm

149 ページ+絵 10 枚

紙表紙簡易製本

『ディ・バラック』の最終号である。なお付録として10月号に相当する部分もあるので、実際の発行日は9月ではなく、10月であったかも知れない。



この号には演劇舞台の書き割りを写した絵が10枚、特別に挿入されている。これらはサイズ185.3cm × 97.4cmの珍しいベタ刷り多色謄写版となっていて、本紙に縦じ込まれた焦げ茶色の紙に貼付けられている。

## P0024

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 第25号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan. No. 25, 17. März 1918.

1918年3月17日発行

謄写版（一部多色刷）

19.3cm × 26.4cm

42 ページ+表紙（表裏）

紙表紙簡易製本

『ディ・バラック』の週刊新聞として発行された単一号である。これは、その表紙絵に見られるとおり、収容所近くの四国霊場一番札所の霊山寺と板東町公民館を会場に開催された俘虜製作品展覧会の特集号である。





## P0025

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 第2巻第1号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan.

Band 2, No. 1, 31. März 1918.

1918年3月31日発行

謄写版（表裏の表紙は4色刷）

19.3cm × 26.4cm

28 ページ

紙表紙簡易製本

第1号から数えて第27号目となるもの。



## P0026

『ディ・バラック』板東俘虜収容所新聞 第2巻第2号

Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando, Japan.

Band 2, No. 2, 7. April 1918.

1918年4月7日発行

謄写版

19.3cm × 26.4cm

42 ページ

紙表紙簡易製本